

境橋 仇討ち 場跡

- ▶ 文久3年(1863)6月2日、土佐藩士 広井磐之助が父(広井大六)の仇となる元同藩士 棚橋三郎を討ち果たした場所です。
安政2年(1855)12月、広井大六は高知城下において、泥酔し抜刀して向かってきた棚橋三郎に斬りつけられ、溺死させられてしまいました。
加害者の棚橋三郎は土籍剥奪のうえ国外追放、被害者側の広井家は跡目断絶となります。
広井磐之助は17歳で、仇討ちのため棚橋三郎を9年間探索しますが、見つけることができませんでした。
文久3年(1863)の春、勝 海舟の寓居先である大坂の専稱寺に勝の門下生である坂本龍馬を訪ねます。事情を説明して探索の協力を依頼し、勝 海舟も協力することとなります。
同年5月25日、紀州加太ノ浦の台場工事でそれらしき人物が居るといふ情報を入手します。
広井磐之助は加太へ駆けつけますが、その頃棚橋三郎は紀州藩に捕縛されていました。
紀州藩から「棚橋三郎を6月1日、紀州と泉州の境の山中村にて追放する」と連絡が入ります。
勝 海舟の門下生 佐藤与之助、千屋寅之助(のちの菅野覚兵衛)、新宮馬之助が助太刀として加勢しました。
6月2日、追放される場所に待ち伏せをし、遂に仇討ちを果たしました。
仇討ちの場所が天領であったため、広井磐之助は堺町奉行所に身柄を拘束されますが、広井磐之助は、すぐに土佐藩住吉陣屋に引き渡され、2ヵ月後には土佐に戻ります。
長年の流浪生活が影響してか、3年後の慶応2年(1866)に病死します。

「海舟日記」によると次のような記載があります。

文久三年六月三日

『大坂へ帰る。広井磐之助復讐、一昨日、和泉山中村にて本意を遂げたる趣、佐藤、千屋より聞く。且、此事によって、紀州家の事を執りし者へ粗品を送り、その労を謝す。広井生は、堺奉行へ訴え出でたり。同所奉行へ糾済みの上、引渡しくれべき旨、頼み遣わす。(以下省略)』



境橋の仇討ちの碑



11月9日まで撤去と書かれた説明板

<日本最後の仇討ちについて>

「日本最後の仇討ち場」とあり、仇討ちの許可をとった上で果し合いを行った最後の場という意味ですが、文久3年以降に次のような「仇討ち事件」が起こっています。

<赤穂勤王党による文久事件と高野の仇討ち事件>

幕末の赤穂藩は、佐幕派と勤王派に分裂し、藩政の勢力争いをしていましたが、佐幕派が実権を握り、勤王派を政治の場から引きずり下ろしました。

これに反感を持った勤王の過激派 西川升吉は「赤穂勤王党」を組織し、佐幕派のリーダーである家老 森 主税、その用人 村上真輔 2人の暗殺を謀ります。

文久2年(1862)12月9日夜、13人の刺客が2人の命を奪うことに成功します。

13人の刺客は藩外へ逃れ、大坂の土佐藩蔵屋敷において保護を受けました。

文久3年(1863)8月18日の政変、続いて蛤御門の変により、赤穂藩では勤王派の勢力が衰えていきます。そして明治維新を迎え、藩庁は、文久事件に関わった両派を仲直りさせようと努めます。

文久事件で暗殺された村上真輔の子孫中心に、かつての刺客たちに対する復讐計画が企てられました。これを察知した藩庁は、生き残っていた刺客6名に高野山にある藩主森家の墓守を命じます。復讐を誓う村上家の子孫7名は、一足早く高野山に行き、6人の到着を待ち伏せして、明治4年(1871)2月30日、仇討ちを成功させます。これを「高野の仇討ち」といいます。

赤穂藩は、「四十七士の討ち入り」だけでなく「高野の仇討ち」と、2回もの仇討ち事件を起こしていることとなります。さて、仇討ちの現場に近い道路脇に「殉難七士の墓」が建てられ、討ち取られた6名(かつての刺客)は、ここで静かに眠っています。なお、6名なのに何故七士なのかといいますと、6名のうちの一人の弟が、文久事件とは全く無関係でありながら勇敢に闘ったため、復讐組が誤って斬ってしまったからだそうです。討ち取った7名は、丁重な待遇を受けていましたが、司法卿江藤新平は、死刑に値すると判断します。最終的には、大阪裁判所は、死罪は免じ禁固刑の判決を下しました。同日、太政官より「仇討ち禁止令」が出されます。(明治6年2月7日)

日本最後の仇討ちは、明治13年、旧秋月藩士 臼井六郎が幕末期に父母を殺害した同藩の一瀬直久を討った事件とされています。臼井は自首後、終身刑を受けます。

2 嘉家作丁 (かけづくりちょう)

和歌山市嘉家作丁

- 寛永10年(1633)、紀ノ川大水害があり、その後堤防斜面に武家屋敷が建てられました。表が道路、裏は堤防で低くなっている欠造(かけづくり)という独特の建築様式です。城下への入り口として人々の往来で賑い、旅宿や休息所もありました。町内の各家は藩士休憩のため軒先を深く出し、高さが統一され「一文字の軒」と称されていました。「おだれ」といわれる深い軒先を通り抜けることができ、東西約300メートルあったそうです。また、この軒先の修復は藩費で賄われていました。面影は残しているものの、現在の大部分は明治以後の建築で、「欠造」の家も少なくなり、軒下を通して通行できる家は一軒もありません。石碑には次のように記載されています。

城下町の北の入り口で交通の要衝である。家の軒先がそろっていて通路であり、参勤交代の休憩所であった。一文字の軒と称す。



3 春泉堂跡 (紀州藩主参勤交代時の休憩所)

和歌山市嘉家作丁

- 嘉家作丁の石碑からやや西側に春泉堂跡の説明板があります。春泉堂は御用青物屋の村橋善兵衛の別宅でした。紀州藩主が参勤交代の時や粉河の別邸に行く途中の休憩所となっていて、「御成屋敷」とも呼ばれていました。



4 津田 出 住 居 跡

和歌山市嘉家作丁

- ▶ 明治維新後、紀州藩(和歌山藩)の藩政改革を手がけ、その後、新政府に出仕した津田 出(つだ いずる)の住居跡となります。

つだ いずる
＜津田 出＞ 天保3年(1832)3月～明治38年(1905)6月2日
明治新政府に協力する姿勢を見せるため、明治初年(1868)、紀州藩主徳川茂承(もちつぐ)は津田 出(つだいずる)を抜擢し、藩政改革を行いました。なかでも兵制改革は重要な柱のひとつであり、全国に先駆けて「交代兵」制度と呼ばれる徴兵制を実施しました。これは、20歳以上の男子から徴兵を行い、3年間の兵役につかせる(その後8年間は予備・補充兵として軍務につく)というものです。
軍事顧問にはカール・カッペンを招き、プロシア式軍事訓練を行いました。軍隊の近代化は関連産業の勃興を促し、和歌山の地場産業の基礎を形成しました。なかでも、綿ネル(フランネル)・皮革産業はその代表的なものです。その実力が評価され、政府に出仕することとなります。
明治4年(1871)の廃藩置県後、大蔵少輔に取立てられ、ついで陸軍省に転じ会計監督長に、さらに明治7年(1874)陸軍大輔に補し少将に任ぜられ、明治8年(1875)元老院議員を兼ね、明治10年(1877)12月以降、刑法草案・治罪法草案・陸軍刑法の各審査委員を務め、明治23年(1890)9月、貴族院議員に勅選されました。



津田 出

5 南方熊楠(みなかた くまぐす) 生誕の地 6 南方熊楠 像

和歌山市橋丁34

- ▶ 博物学者、菌類学者、民俗学者。
菌類学者としては動物の特徴と植物の特徴を併せ持つ粘菌の研究で知られています。南方熊楠は慶応3年(1867)4月15日、南方弥兵衛(39歳)、妻スミ(30歳)の次男としてここ橋丁で誕生しました。
明治16年(1883)に上京し大学予備門(現東京大学)に入学します。同校退学後の明治20年(1897)1月に渡米し、シカゴで地衣類学者カルキンスに師事して標本作成を学びました。その後、キューバを経てイギリスに渡り、大英博物館で標本整理の仕事に従事しながら独学で粘菌類の研究を続けます。
この間、科学誌『Nature』に寄稿し、明治33年(1900)に帰国した後も研究を継続し、計10回の論文が採用されました。
南方熊楠は、粘菌の研究だけでなく、民俗・文学・歴史等の分野にも多くの論文を発表しています。



南方熊楠



＜南方弥兵衛(後に弥右衛門)＞
13歳で和歌山城下に出てきて福島屋(清水平右衛門)の丁稚、更には番頭を務めました。雑賀屋に入贅(いりむこ)として迎えられ、襲名して弥兵衛と称するようになりました。はじめ金物商を営み、米穀商、金貸業と転じ再び雑賀屋を興しました。
明治11年(1878)、家督を藤吉に譲り弥右衛門と改名、明治22年(1889)には三男常楠と協力して酒造業をはじめ、南方酒造(現・株式会社世界一統)の基を築きました。現在、株式会社世界一統の代表取締役は南方康治さんです。
明治40年(1907) 大隈重信が酒名を「世界一統」と命名しました。